

カンボディア・アンコール遺跡群西トップ遺跡の建築調査

—2010年度の成果—

はじめに 西トップ遺跡の建築調査は、基本資料となる図面の作成、建築の特徴と歴史の変遷の解明、建築当初の復原図の作成を目的とし、2006年度の予備調査より継続的におこなってきた。5ヵ年計画の最終年度となる2010年度は、2010年5月と8月に現地調査をおこなった。調査内容は平面図・断面図・立面図作成のための実測調査、各所の石材の線形（モーディング）の調査、内部ラテライト石材の位置の確認などである。また、類例調査をアンコール周辺の遺跡およびタイ王国アユタヤ遺跡群の寺院遺跡でおこなった。

西トップ遺跡の建築的特徴 中央祠堂の砂岩製基壇外装の内側には、線型をもつラテライト製の基壇が存在し、中央祠堂に先行するラテライト製の前身建物があつたことが判明している。開口部に用いられている紅色砂岩製の装飾柱・装飾楣石（リンテル）などは、寸法や納まりなどがこの先行ラテライト基壇と合致することから、両者は一連であると考えられる。すなわち、紅色砂岩製の石材は、砂岩に改築した際に転用したものと考えられる。

東台座は中央祠堂東面階段を遮るように位置する。取りつき部分も一連ではなく、東台座は後補と考えられる。東テラスはこれまでの調査で後補であることがあきらかになっているが、機能の面からみても、東台座は東テラスと同時とみるべきである。また、東台座の側面および東テラス内側の石材に2時期分の欠きこみを確認した。古い方は南北方向の石材が取りついていた痕跡で、東台座増築時の中成基壇前面の外装の痕跡であろう。新しい方は木製円柱を立てるためのもので、その際、東台座増築時の階段と中成基壇の外装を撤去し、現在の階段を設置したと考えられる。つまり、東台座は東テラスと同時に増築されたもので、後に木製柱による覆屋を東テラスにかけたことがあきらかになった。

中央祠堂の開口部は装飾楣石を支える装飾柱の前に付柱が立ち、その上部に前面の妻飾りが乗る。正面から見ると妻飾りは二重になっており、一重目は付柱の上部にのせられ、二重目は開口部と塔本体をつなぐヴォールトの前面に取りつく。妻飾りの石材はいずれの面でも現存していないが、ヴォールト部は東面および南面で残存す

る。装飾楣石上部の石材は、比較的残りの良い南面を見る限り、装飾楣石の前面で面をそろえており、一重目の妻飾りは付柱の上に渡した長材の上に載せていたと考えられる。これらにより装飾楣石上部の妻飾りと塔本体との取り付け部分までは現状より復原可能であることがあきらかになったが、屋根構造については類例からの考察が必要になった。

南北祠堂は、基壇および本体の形式がそれぞれ異なる。南祠堂の下成基壇は、基壇外装の線形の形状や隅部の納まりから中央祠堂の下成・中成基壇と同時期と考えられるが、南祠堂の中成基壇はこれらより後の時期である。北祠堂は下成基壇から主体部まで一連と考えられる。主体部は南北両祠堂とも開口部の間を鋸刃状平面とし、内部は十字の通路をもつとみられる。開口部は、北祠堂では南面と西面、南祠堂では西面に壁が入ることを確認したが、それ以外の面は崩落のため詳細は不明で、南北祠堂で明確な違いがあるかはあきらかではない。軒回りは南北祠堂ともほぼ同じ形式で、開口部の柱上に横架材を渡しその上に妻飾りとナーガの彫刻をのせる。南祠堂と北祠堂の中成基壇と主体部では、平面など共通する点もあるが、石材寸法や線形などに違いがみられ、時期差または工人差があるものと考えられる。

類例調査 アンコール遺跡群周辺では、10世紀から16世紀にかけての遺跡38件で類例調査をおこなった。調査では、基壇の構造、階段の形態および納まり、建物の開口部の形式、屋根構造、線型の形状、仏教テラスの形式などに注目した。

中心建物については10世紀から14世紀にかけての遺構と比較した。中央祠堂は12世紀以降の類例に似た構造を示すいっぽうで、南北祠堂はさらに年代が降ると考えられる。また線型意匠からは、中央祠堂も含め、13世紀以降に降るとみられる。

テラス、結界石、仏塔は14世紀以降の仏教寺院の構成要素で、西トップ遺跡の東テラス増築の時期を判断する材料となる。祠堂（仏堂）とテラス、結界石、仏塔の位置関係には様々なパターンがあるが、年代や規模による傾向は特にみられなかった。いっぽうで、西トップ遺跡の東テラスの外装の線型の形状は、15世紀以降の線型と近く、東テラスの増築は15世紀以降に降る可能性がある。

また、アンコール周辺では少ない14世紀以降の類例と



図14 西トップ遺跡東台座北面の石材取りつき



図15 西トップ遺跡北祠堂南面開口部壁材の取りつき



図16 アンコール周辺のテラス寺院(テップ・プラナム)



図17 アユタヤの寺院遺跡(ワット・ラチャブラーナ)

して、タイ王国アユタヤ遺跡群で、クメール様式の仏塔(ブラーン)をもつ14世紀から15世紀にかけての寺院遺跡4件の調査をおこなった。調査では主に、塔身部分の立ち上がりと開口部の納まりに注目した。

アユタヤ遺跡群の仏塔は、基壇や主体部の形状や構成において、おおよそアンコールに類似する。主要な構造材はレンガであり、規模の大きなものや開口部など、構造的に大きな部材が必要な部分はラテライトを使用する。細かい線形や表面の装飾はスタッコで表現する。

主体部の平面は各開口部の間を全体的に鋸歯状に造るもので、足元からそのまま塔頂までたちあがる。この平面は西トップ遺跡の南北祠堂に類似する。14世紀以前のアンコールには見られない形式のため、西トップ遺跡南北祠堂の時期の根拠とできる。妻飾りは塔の正面につくもののみ彫刻による装飾を施し、側面のものには装飾を施さない例もある。近年に大きく修復されているため、この形式が当初のものであるかは不明だが、西トップ遺跡の妻飾りの復原にあたっては考慮すべき事例である。

西トップ遺跡の変遷 西トップ遺跡でのこれまでの調査成果より、西トップ遺跡の遺構変遷は以下の5時期と想定される。

(1) ラテライト製の前身建物が造られる。紅色砂岩製の装飾柱・装飾楣石・開口部をとまなう。彫刻や線型よ

り10世紀末頃と考えられる。

(2) 砂岩による祠堂に改築される。南祠堂基壇も同時期に造られる。中央祠堂の北面には、南祠堂基壇と同規模の基壇が造られた可能性と、基壇は設けず、西面のように階段が突出して設けられていた可能性がある。

(3) 南祠堂主体部、北祠堂基壇および主体部が増築される。南北祠堂の主体部の形式より、14世紀末以降と考えられる。

(4) 中央祠堂東面に東テラス・東台座が増築される。外装の線形の形状から、15～16世紀と考えられる。

(5) 東台座周辺を改造し、テラス上部に木製の屋根を架ける。東台座両側の階段も現状のものに改修される。

まとめ 5カ年にわたる調査により、西トップ遺跡の建築的特徴と変遷があきらかにすることができた。西トップ遺跡は、10世紀、14世紀、15世紀と大きく3時期の変遷があり、アンコール遺跡群の歴史を語る上でも重要な遺構と位置付けられる。特に、12世紀の遺構を中心とするアンコール遺跡群の中では14世紀以降の状況を残す遺構として評価できる。ラテライト製の前身建物については部分的な情報しか得られず、詳細の解明は解体にともなう調査にゆだねたい。(番光・大林 潤)